
 学 会 記 事

第3回新潟ゲノム医学研究会

日 時 平成15年6月28日(土)
午後1時30分～
会 場 新潟大学統合脳機能研究センター
6階

I. 一般演題

1 放射線誘発マウス胸腺リンパ腫の感受性遺伝子座の解析

田村 康・藤澤 裕美・木南 凌
新潟大学大学院医歯学総合研究科
遺伝子制御講座分子生物学分野
(第一生化学)

発がんリスクを左右する遺伝因子が「古い起源をもつ、ありふれたアレル」に由来するという仮定を基に、ヒトの大規模実験が進められている。しかし、それがすべてのがん当てはまるとは限らない。モデル動物は連鎖不平衡解析でどこまで感受性遺伝子を補足できるかを推定することができ、ヒト QTL 解析の補完的役割をもつ。実際、遺伝的相互作用の存在が示され、QTL 解析の複雑さ・困難が指摘されている。

我々は放射線誘発マウス胸腺リンパ腫の感受性遺伝子座の単離・同定を目指して解析しているが、その現状を報告する。詳細なコンジュニックマウスの解析から、がん発症の頻度を修飾する感受性遺伝子座を第4染色体上の2.5Mbの内にマップした。現在、ハプロタイプ解析、遺伝子の検索・同定の作業に入っている。これらの結果は、従来の遺伝学的解析で少なくとも一部の感受性遺伝子が単離できることを示している。

2 IgA 腎症における第6染色体上一塩基置換多型の解析

近藤 大介・佐藤 文則・滝口 純
宮下 哲典*・後藤 真・成田 一衛
桑野 良三*・下条 文武
新潟大学医歯学総合研究科内部環境
医学講座腎膠原病分野
新潟大学脳研究所附属生命科学リソ
ース研究センター遺伝子実験部門*

IgA 腎症は慢性糸球体腎炎において高頻度にみられる原因疾患であり、20年の経過で30から40%の症例で腎不全に至ることが知られている。IgA 腎症には家族内集積が認められる例があり、遺伝要因の関与が強く疑われている。2000年 Lifton らのグループの Nature Genetics の報告では家族性 IgA 腎症症例を対象とした全ゲノムの連鎖解析において第6染色体 D6S1040 に強い連鎖を認め、同マーカー近傍に IgA 腎症関連遺伝子座の存在が疑われた。我々のグループは、日本人の IgA 腎症症例で同部位のマーカーの連鎖を調べたところ同様に第6染色体 D6S1040 に強い連鎖を認めた。今回我々は IgA 腎症関連遺伝子の追及のために同部位近傍の数箇所の一塩基置換多型を調べアレル頻度とハプロタイプについて正常人との比較を行った。その結果を今回報告する。

3 Apert 症候群型変異 FGFR2 の頭蓋顔面発育に対する特異的作用とそのメカニズムについて

永田 昌毅・関 雪絵・高木 律男
網塚 憲生*・Glen Nuckolls **
Harold Slavkin ***

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面口腔外科学分野
同 顎顔面解剖学分野*
Cartilage Biology and Orthopaedics
Branch, NIAMS, National
Institutes of Health **
University of Southern California
School of Dentistry ***

Apert 症候群は特有の頭蓋顔面変形、合指症を